

横浜市インフルエンザ流行情報 9 号

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所(最新版はHPをご覧ください)

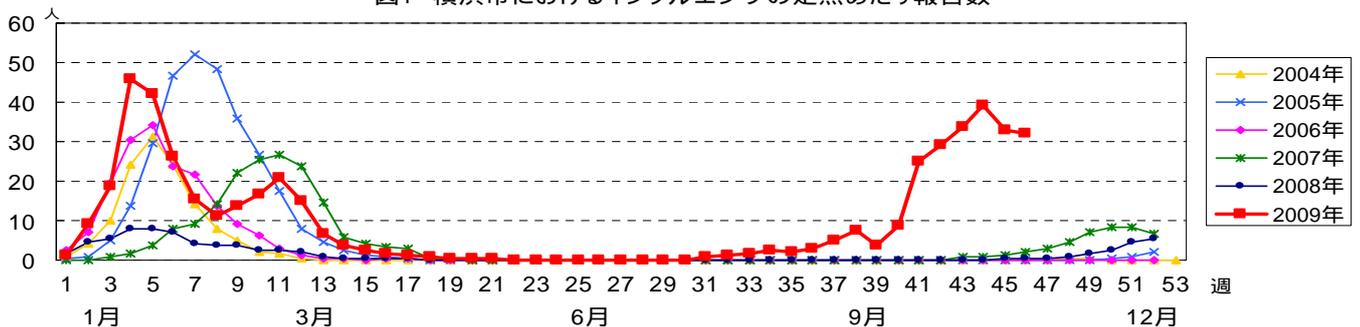
1 インフルエンザの定点医療機関あたりの報告数が、2週続けて減少しています。

2 年齢層内訳では0～4歳に上昇が見られています。

- 市内流行状況については、第32週(8月3日からの週)に流行の目安となる定点あたりの報告数1を超え、第44週には39.18と今シーズン最大となりましたが、第45週は32.93、第46週(11月9日からの週)では32.04と、2週続けて減少しています。第45週の火曜日が祝日であった影響を考えると、この2週間は減少傾向にあると思われませんが、過去5年の流行ピークと比較すると、減少の度合いが少なく、今後のカーブの増減に注意が必要です(図1)。
- 市内の学校等施設閉鎖報告数も、第44週では262施設患者4969人、第45週では202施設3876人、第46週では190施設3227人と、漸減しています。
- 標榜科目別患者報告数では、内科定点より小児科定点からの報告数が減少しています(図2)。
- 年齢層別推移では、多くの年齢層が減少ないし横ばいの中、0～4歳がわずかですが上昇しているのが目立ちます(図3)。0～4歳は、従来の季節性インフルエンザの脳症好発年齢であり、今後の入院状況にも注意が必要です。
- 年代層別推移では、今までどおり20歳未満の報告が殆どです(図4)。
- 第46週の迅速診断キットでは、A型が3063件、B型が4件、A型B型とも陽性が1件で、殆どがA型でした。
- 10月の病原体定点からの66検体のうち、57検体にAH1pdm、1検体にRSウイルスが認められています。冬の小児の感染症の流行にも注意が必要な時期となりました。残りの検体は培養の途中であり、特定の病原体は検出されていません。11月16日までに採取された31検体のうち8検体にはAH1pdmが検出され、残りのうち16検体もMDCK細胞の細胞変性効果(CPE)よりAH1pdmと思われます。
- 2検体に、オセルタミビル耐性を示唆する遺伝子変異(H275Y)が検出されましたが、重症化を示唆する変異は検出されていません。
- 行政区別としては、減少区が目立ちます(図5)。
- 今後もウイルスの薬剤耐性や重症化等性状の変異に監視が必要と思われれます。

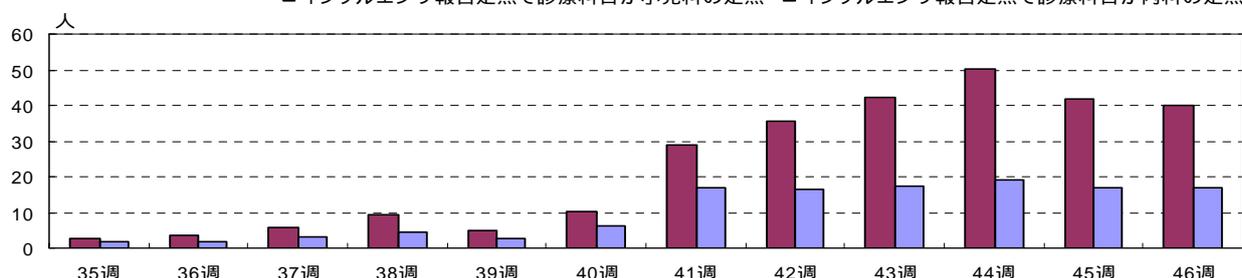
1 市内145か所(小児科88か所)の定点医療機関からの報告(図1)

図1 横浜市におけるインフルエンザの定点あたり報告数

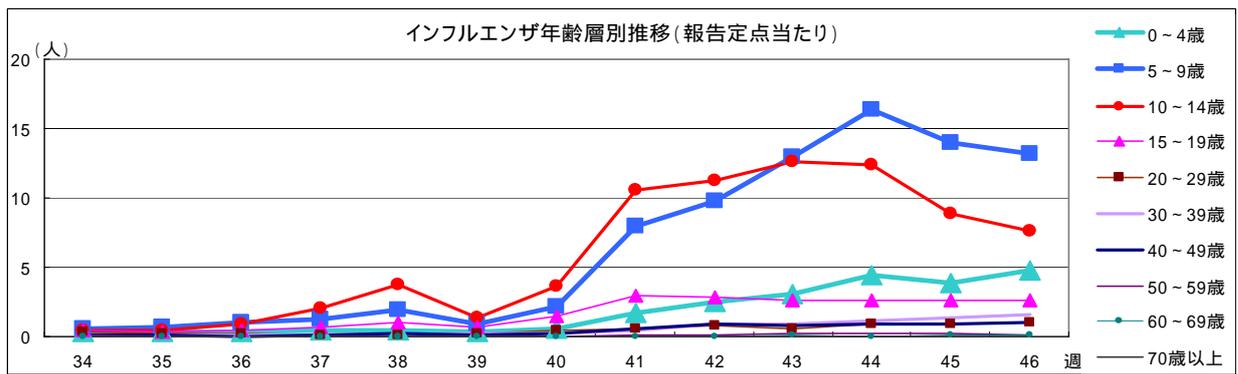


2 標榜科目別患者報告数(図2)

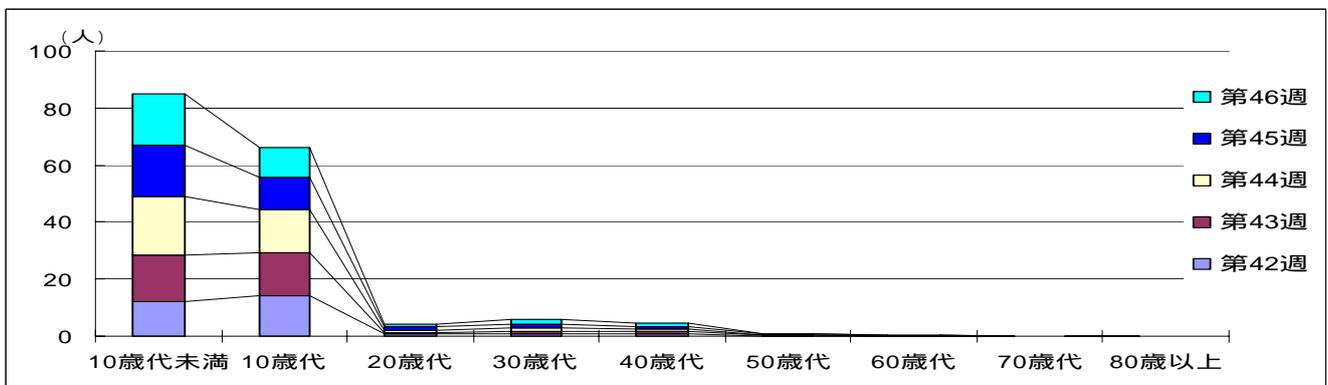
■ インフルエンザ報告定点で診療科目が小児科の定点 ■ インフルエンザ報告定点で診療科目が内科の定点



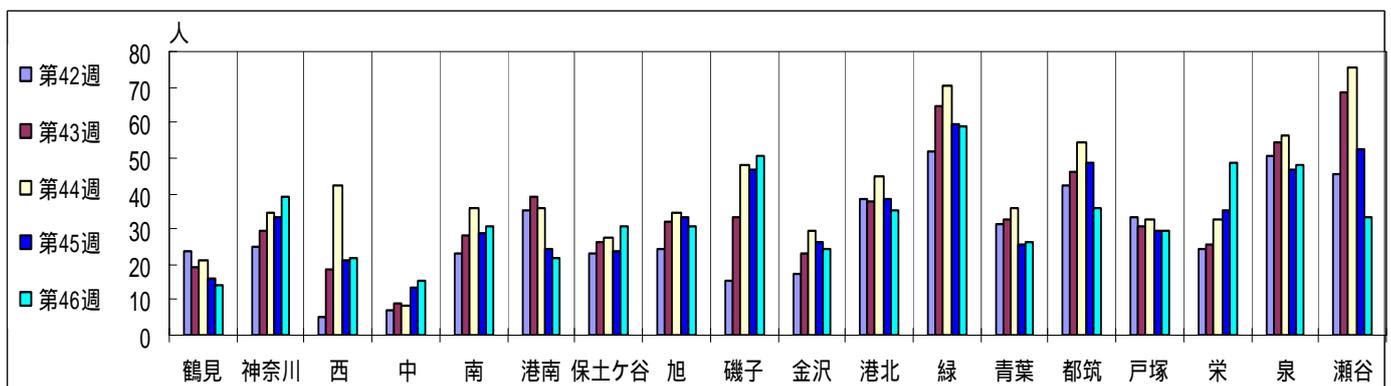
3 年齢層別推移(図3)



4 年代層別推移(図4)



5 行政区別情報(図5)



市内の状況については <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html> を
 全国の状況については、<http://idsc.nih.gov/jp/disease/influenza/>
 全国の集団かぜの状況については、<http://idsc.nih.gov/jp/idwr/kanja/infreport/report.html> をご覧ください。

【お問い合わせ先】 横浜市健康福祉局 健康安全課 TEL 045(671)2463
 横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課 TEL 045(754)9816
 同 検査研究課ウイルス担当 TEL 045(754)9804